

## 減災対策推進特別委員会行政視察概要

1 視察月日 平成29年8月7日（月）～8月8日（火）

2 視察都市及び視察事項

（1）沖縄県沖縄市

防災研修センターを活用した、自助・共助の意識啓発の取り組みについて

（2）沖縄県那覇市

自主防災組織増加のための取り組みと今後の課題について

3 視察委員

副委員長	伊	波	俊之助
委員	輿	石	且子
委員	佐	藤	茂
委員	坂	井	太
委員	清	水	富雄
委員	遊	佐	大輔

## 視察概要

### 1 視察先

沖縄県沖縄市

### 2 視察月日

8月7日（月）

### 3 対応者

消防本部消防長（受け入れ挨拶）

消防本部次長兼総務課長（説明）

消防団長（説明）

### 4 視察内容

（1）防災研修センターを活用した、自助・共助の意識啓発の取り組みについて

#### ア 防災研修センターの目的

「災害を知る、災害を自ら体験する、災害に備える」を基本に、体験や講習会等を通し、防災意識の向上と「ゆいまーるの精神」で助けあう自主防災組織の結成促進を目的として、小学生から大人まで幅広い市民が利用することにより、災害に強い地域づくりの実現に寄与する施設として、旧通商産業省による産業再配置促進施設整備費補助事業（国庫補助）を活用し、平成11年6月からオープンしている。また、機器の老朽化に伴い、沖縄振興特別推進交付金（一括交付金）を活用して、平成25年2月から同年10月まで改修工事を行い、同年12月2日からリニューアルオープンした。

#### イ 事業費

（ア）平成11年

総事業費：1億9635万円

国庫補助金：8503万4000円

（イ）平成25年（リニューアル）

総事業費：1億9772万3000円

一括交付金：1億5821万7000円

ウ 防災研修センターを活用した、自助・共助の意識啓発の取り組み

本市防災研修センターは、県内唯一の施設であることから、市内を問わず、年間約1万人の方が訪れている。これまで沖縄県民は、地震に対する危機意識が低かったが、平成23年3月11日の東日

本大震災以来、地震は人ごとではないと感じ、地震、津波に対する防災意識が高まってきている。そこで、来館者に対して、大規模広域災害が発災した際には、行政が全ての被災者を迅速に支援することが難しいこと、行政自身が被災して機能が麻痺する場合があることなど、公助の限界を説明している。また、そのような場合には、発災後しばらくの間は、行政の支援を受けることなく、地域住民が自発的に避難行動をすること、地域コミュニティーで助け合って行動することの重要性、自主防災組織結成の必要性についてもあわせて説明している。

#### エ 自主防災組織の状況

本庁防災課、消防職員、消防団員、女性防火クラブ員で連携を図りながら結成の促進に向けて取り組んでおり、現在24組織（自治会組織17、その他7）が存在する。訓練時には、消防職員による応急手当講習（AED）や消防団員による消火器取り扱い訓練、女性防火クラブ員による炊き出し訓練などの支援を行っており、防災の基本である、自助・共助・公助の確立に向けて取り組んでいるところである。

#### オ 防災広報活動

市広報誌、消防本部ホームページ、各種イベント、春・秋火災予防週間、自主防災訓練、コミュニティーラジオへの出演で情報発信や啓発等を行っている。

#### カ 質疑概要

Q センターの利用者数の推移はどうか。

A 平成11年のオープン後から平成22年までは、年間の利用者数が5000人台から7000人台であったが、東日本大震災が発生した平成23年は利用者数が約9300人と増加した。その後、平成25年にリニューアルしてからは、年間の利用者数が1万人を超えるようになってきている。

Q 若年層のセンター利用者数はどうか。

A 平成28年の年間利用者数で見ると、市内利用者4158人の内、園児が930人、小学生が1560人、中学生が101人、高校生が34人である。また、市外利用者6224人の内、園児が520人、小学生が2301人、中学生が383人、高校生が242人である。

Q 女性防火クラブの概要を教えてください。

A 「地域の防火・防災は、婦人の手で」を合言葉に、昭和59年6月に10支部、会員数216名で発足した組織である。活動内容

は、出初式や全国火災予防運動週間等の消防行事に参加して、防火意識の啓発を行っている。また、地域支援として、救急法教室や消火器の取り扱い訓練、防火映画の上映などを行い、家庭内で身近に起こる災害に対処できるように取り組んでいる。

## (2) 委員所見

横浜市は、平成28年度に市民防災センターをリニューアルし、地震体験や避難行動体験、消火体験などの体験ツアーや、初期消火器具やAEDの取り扱いなどの体験型プログラム等を通じて、市民への自助・共助の意識啓発を行っている。今回の視察では、沖縄市でも、平成26年度に防災研修センターをリニューアルし、体験型のコンテンツも活用しながら、市民への自助・共助の意識啓発を行っていることを確認した。座学による意識啓発だけでなく、このような体験施設があることは、市民の方にとって非常に有意義である。今後は、市民全体に自助・共助の意識啓発を行っていくために、どちらの施設も、新たな利用者の掘り起こしのための仕掛けが重要であると感じた。

## 視察概要

### 1 視察先

沖縄県那覇市

### 2 視察月日

8月8日（火）

### 3 対応者

議会事務局調査法制課主幹 （受け入れ挨拶）

総務部総務課市民防災室主幹 （説明）

### 4 視察内容

#### （1）自主防災組織増加のための取り組みと今後の課題について

##### ア 自主防災組織の状況

本市では、平成29年2月現在で60団体の自主防災組織が結成されている。かつては、自治会や町内会が中心となって結成されることが多かったが、近年では女性を中心とした組織や子育て世代によるPTA単位での結成もふえてきている。

##### イ 自主防災組織増加のための取り組み

自治会や町内会を初めとした地域住民等からなる住民組織との交流の機会を積極的に活用して、防災研修や講話等を行い、地域における防災意識を高めたり、公助の重要性を説明するとともに、組織結成の必要性をお伝えしている。また、ホームページなどの広報媒体も活用しながら結成の促進を行っている。このような取り組みや、東日本大震災以降は、市民の防災意識が高まったこともあり、組織数は増加傾向にある。

##### ウ 自主防災組織への支援

#### （ア）那覇市自主防災組織育成指導要綱（平成24年9月1日施行）

第4条で「市は、自主防災組織の育成について、住民組織の自主性を尊重し、地域の実情に応じた組織づくりを働きかけるとともに、災害発生の際に十分な防災活動が行われるよう指導するものとする。」「市は、防災関係機関と相互に協力し、自主防災組織の育成指導に関する業務を積極的に実施するものとする。」という自主防災組織の育成指導方針を掲げるとともに、第10条で「市は、自主防災組織活動に係る指導について、その実効を期すため自発的な活動を行うよう計画的に働きかけ、当該組織の活

性化を図るよう指導するものとする。」という自主防災組織の活動への指導に関して規定しており、これらの規定に基づいた支援を行っている。

(イ) 那覇市自主防災組織に対する防災資機材等交付要綱（平成24年9月1日施行）

本要綱で、自主防災組織への防災活動に必要な防災資機材等の交付について規定しており、物品面からも自主防災活動への支援を行っている。交付対象となっているのは、①初期消火器具類、②救出救助用器具類、③救護用器具類、④情報・通信器具類、⑤炊事器具類、⑥訓練用資機材、⑦その他資機材である。

エ 今後の課題

市内では、既存の自治会や町内会の構成員が高齢化してきているとともに、若い世代や子育て世代の加入率も低いことから、地域で中心となって動ける方が少なくなっていることが課題である。近年では、女性を中心とした組織や子育て世代によるPTA単位での結成もふえるなど、細やかな単位で自主防災組織も立ち上がってきている。若い世代や子育て世代の自治会や町内会への加入率向上も重要であると考えているが、このような細やかな単位での組織と既存の自治会や町内会が協力し合えていくことも重要であると考えている。

オ 質疑概要

Q 消防団への入団数を教えてほしい。

A 市内では平成29年4月現在で、全8分団が結成されており、正副団長含め全74名が加入している。その内、20代から60代の19名の女性団員が加入している。自主防災組織の結成と同様に、消防団への入団促進も行っている。

Q 消防団に対する研修等はどうか。

A 座学勉強会等を実施し、地域社会における消防防災体制の中核として重要な役割であることなどを説明し、消防団としての意識醸成を行っている。余談ではあるが、消防団から試験を受けて、消防職員になる方もいる。

(2) 委員所見

自主防災組織は消防団と同様に、地域住民が主体となって地域の火災や災害の拡大を予防し抑制していくという重要な役割を担っている。那覇市では、自主防災組織増加のために、さまざまな取り組みを行っており、年々組織数も増加してきている。また、自主防災組織に対する支援も充実しており、結成後のフォロー体制も確立されていると

感じた。自主防災組織と消防団、どちらにも共通して言えることは、地域コミュニティの重要性である。今回の視察を通じて、自治会や町内会などの既存コミュニティに若い世代や子育て世代をどう巻き込んでいくかが改めて重要であると感じた。